万国津々浦々

アーミッシュの人びとのコミュニケーション
—アメリカ合衆国における静かな試み—

鈴木 七美
（すずき ななみ）
本館先端人類科学研究部

ニッケル・マインズ銃撃事件の波紋

六月に三年ぶりでペンシルヴェニア州ランカスター郡を訪れると、緑のトウモロコシ畑が地平線まで続く変わらぬ風景が広がっていた。馬車が乗用車と同じ舗装道路を行き交い蹄（ひづめ）の音がして馬糞の匂いも漂っている。今回は「アメリカのアーミッシュ」というテーマの国際学会で、一九九九年から京都文教大学文化人類学科の学生たちとこの地で調査してきた経過を報告した。会場には研究者たち、伝統的服装に身を包んだアーミッシュの人びと、そしてメディアや警察関係の人まで詰めかけていた。

アーミッシュの起源は、一六世紀スイスの宗教改革急進派アナバプティスト（再洗礼派）に遡る。迫害を逃れて新天地を求め一八世紀に移住したアーミッシュは、もっとも保守的とされるオールドオーダーのグループが一般社会と分離しかつて変わらぬ生活を目指していること、高等教育に反対でワンルーム・スクールで八年生までの教育に限定していること、非暴力の主張から戦争や軍隊を否定していることから、常にアメリカ社会に波紋を投げかけてきた。最近は人口が増加しコミュニティが拡大していることでも注目を集めている。現在はとりわけ、二〇〇六年一〇月に起きたワンルーム・スクールでの銃撃事件によって静かな地域は多くの人びとに知られるようになった。無抵抗の少女たちが犠牲となったことはもちろんだが、事件直後にアーミッシュが銃撃犯を「許すこと」（forgiveness）を表明したことが伝えられ話題となっている。

アーミッシュのメッセージ

長きにわたって学生たちやわたしとともに歩いてくれたアーミッシュ・メノナイトのAは大分年をとった。きまりに従わないメンバーに対し社会的忌避（shunning）を実践するオールドオーダー・コミュニティから離脱して以来、忌避（shun）され続けてきた。いちばん辛いのは、家族が苦しんでいるとき、助けることが許されないことだという。

彼女に勧められてわたしは犠牲となった少女たちの関係者を訪問することになった。近くに来たら必ず声をかけるのがこの辺のつきあい方なのである。といっても、現代社会の悪を呼ぶと警戒されて電話はないので、一軒ずつ戸を叩く。裸足で出てきたメノナイトのIは、「許し」について、「リベンジ」を思わないことによって被害者が「日常生活として今日を生きること」「コミュニティが明日に備えること」と解説してくれた。だが子どもに「許すこと」を伝えるのは難しいという。三人の娘が巻き込まれ一人を失ったLは「子どもは八人いたが今は七人」と語り、治療中の娘の経過を細かに伝えた。銃撃事件後この地では、教派をこえて人びとが語り合うさざめきが聞こえるようだ。もとアーミッシュ・メノナイトで現在はモダン・メノナイトとして会社を経営するHは、スポークスマンを務め、世界各地から寄せられる手紙や見舞の品を彼らに届けている。

ランカスター郡アクロンには北米でもっとも大規模なメノナイトを中心とした、世界の災害・貧困・紛争地への援助組織がある。フェアトレードを謳う店舗「一万の村」も北米各地で展開してきた。近年宗教上の紛争調停への参加を試みている。訪ねると、アーミッシュも生活様式を変えずに活動に加われるよう工夫が凝らされている。メノナイトとアーミッシュは宗教的実践の違いから反目し分離してきたが、近年は同じ目的にむけて協力する姿勢が顕著だとAも語る。姪のメノナイトRの教会でも、最近は信条によって異なる衣装をつけた人びとがともに礼拝するようになった。Shunに悩む元アーミッシュへの支援にもさまざまなグループがかかわっている。信念を保持し差異を認識しつつどのような協同の実践が可能なのか、世界から距離をとるアーミッシュたちがメッセージを投げかけているのかもしれない。